
少しの卒業

灯夜

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

少しの卒業

【Nコード】

N5647B

【作者名】

灯夜

【あらすじ】

卒業式が終わった後。先輩への告白を考えつつも、実行に移せず
にいた主人公。その曖昧な想いの決着。

見込みが無いのは、解っているんだ。
貴女の隣には、別の人が居るのだから……。
だから、せめて想いの決着だけは付けよう、そう決めたのにな。

結局僕は、教室の机からぼんやりと、外を眺めているだけ。外に広がる景色には、卒業を惜しむ在校生と卒業生が、ずらりと校門までの短い道を埋め尽くしていた。

春の陽気がポカポカと暖かく、柔らかな日差しに、だんだんと睨が重くなっていく。

(このまま終わっても良いかな、どうせ片思いなんだし)
気だるい怠惰な時間は、教室の引き戸を勢い良く開ける音に崩される。つかつかと歩み寄ってくる人影。

「行くよ！」

そんな風に一声掛けて、手を掴み引き摺りそうな勢いで僕を引っ張る遥。

「何処に？」

「自分で、告白して決着つけるって言ったんでしょ！ 最後までらい、ちゃんと振られる」

遥は、怖いくらいの剣幕で捲くし立ててから、僕に背を向けた。

「うわ、酷い言い草」

茶化しながら、その背中を渋々付いて行く。

「由香先輩部室に寄ってから帰るって言ってたから、今なら人の少ない校舎で話せるチャンスだって」

まるで自分の事のように、弾んだ声で戦意を煽る。

「振られるのが分かっていて、チャンスも何も無いと思う」
そっぽを向いて答える、あくまで冷静な僕。

「ええい、ここまで来たらうだうだ言うな！」
結局、強引に引つ張られてしまっただけ。

階段を一つ上がる。

過ぎていくプレート、美術室、美術準備室、音楽室、そして辿り着いたのは音楽準備室。ちょうどその時、由香先輩がヴァイオリンケースを抱えてドアから出てきた。

「卒業おめでとうございます由香先輩、たまには部活見に来てくださいね」

遙が、にこやかに話し掛ける。

「そんな邪魔になりそうな事しません」

先輩は笑顔で答えて、遙とクスクス笑い合った。

「それじゃ、私は一足先に外へ出ていきますね。あ！　そうそう、荷物にかなりませんが卒業祝いです」

遙は喋りながら、僕の肩を掴んで前に押し出す。

「そんな事言ったら可哀想よ」

「僕的には、可哀想って言われる方がへこみます」

少しムツとしてぶっきらぼうに言った僕、苦笑いする由香先輩。

その中、張本人である遙は、『頑張りなさいな』と目配せして去っていった。

「先輩、卒業おめでとうございます」

微妙な空気を払拭するために、真面目な顔を作って、僕はそう告げた。

「うん、ありがとう」

右手を差し出して、『持ちましょうか？』と目で訴えると、彼女はやっぱりと首を横に振り、そして急にハツとした表情になった。

「あ！　教室に鞆置いて来ちゃったんだ」

「お供します」

僕は、少し笑みを浮かべて、横に並んで歩き出す。二人で話す言葉は少なかったけど、取り巻く空気が多くのモノを伝えていた。

少しだけ開いた窓から入る風が、彼女の長い黒髪を揺らす。
「もう風も、冷たくないのね。受験に追われて、気がつくのが遅れてしまったみたい」

ゆっくりと話す先輩の、微笑を湛えた横顔を見ると、この気持ちなんかどつくにはれているんじゃないかって気さえする。だからなのかな、告白しても何も変わらないって確信がある。ちよつとおでこを小突かれて、それから多分いつもの二人。そのいつもの二人に戻れてしまう辛さを消すための、今日だったんだけど……。
「桜はまだですから、きつと春の一步手前ですよ」

その時、僕の声を割って、軽快なリズムが響いた。先輩が、スカートのポケットから携帯を取り出し、メールを確認している。

「彼氏さんですか？」

「うん、下駄箱の前の広場にいるのだけど、すっかり待たせてしまったわ」

足を速める先輩に合わせて、ペースを上げる。半歩遅れて続く僕の視線は、前を見つめる先輩の視線と重なりはしない。

やっぱり、この言葉は告げないでおこう。

もう少しだけ、この想いを抱きしめていたいから。

共有出来はしない、この想いを。

急ぎ足で鞆を持って、教室を後にする。小さい校舎、少し歩けば下駄箱はもう目の前。上手く表情が作れていない気がしたけど、気持ちだけ笑みを浮かべてから、僕は言葉を選んだ。

「それじゃ先輩、さよなら」

先輩は、そう言った僕の額をツイと人差し指で押して、にっこり笑った。

「挨拶が違っでしょ？」

そして先輩はそのまま一歩だけ下がって、僕と向かい合う。

「またね」

優しい笑顔で呟く様に告げた彼女は、手を振ってから下駄箱を後にした。

そうして一人残された僕は、曖昧な想いを抱えたまま教室に戻り、また空を見上げた。

すると、その肩をポンと叩かれ、振り向いた頬を指でつつかれる。「せめて告白するはずじゃなかったっけ？ 協力しがいが無いなあ」遙が悪戯っぽく言ってから、声のトーンを落として続ける。

「良かったの？」

「良さ、折角の春だし……僕にとっても、『卒業』するのに良い季節だよ」

桜はまだ蕾だけど、晴れ渡った空は暖かく、春の日差しが教室の中にも降り注いでいた。

「そっかー、ってあんたの卒業には、まだ一年あるでしょうが」

笑顔でつつこみを入れる遙に、僕はちよつとだけふざけて、少し舌を出す。

「そうだったね」

回り続ける時計の針。
過ぎ行く一つの季節。

そんな時間の中で僕は、少しだけ『卒業』出来たのかもしれない。

(後書き)

いかがでしたでしょうか？
少し季節を先取りしました。
コメントは次回以降の作品の参考にしますので、何かございましたら宜しくお願いいたします。

少しの卒業

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5647b/>

少しの卒業

2008年11月7日08時21分発行